2025 年 11 月 17 日

2025 年度　中国語教育学会 第 1 回研究会　実施要項

1、開催日

2025 年 12 月 13 日（土）13:00～15:15

・オンライン（zoom）で実施。12 月 11 日（木）までに申込者に Zoom アドレスを送信予定です。
・参加費無料（会員以外は google フォームで事前申込）**12 月 6 日（土）23:59 までにお申し込み下さい。**

https://forms.gle/5k6zRbSCwfbmZbM16

2、当日の流れ（発表 30 分＋質疑応答 10 分＝1 人 40 分）

13：00～13：05	**諸注意**
13：05～13：45	**発表者 1 (質疑応答含む)**
13：45～13：50	**休憩（5 分）**
13：50～14：30	**発表者 2 (質疑応答含む)**
14：30～14：35	**休憩（5 分）**
14：35～15：15	**発表者 3(質疑応答含む)**

＜お願い＞　・セキュリティの観点から、入室者の確認を致します。入室されましたら Zoom のお名前を「フルネーム_所属」に変更してください。
・発表中、お聞きになる方は必ず音声・ビデオをオフにしてください。質問はチャット欄への記入、あるいは発表終了後にマイクオンで、音声での発言をお願いします

発表要旨

発表者 1・研究発表

日中同形語の教授法に関する研究—『国際漢語教育漢語水準等級標準』を基準として

長谷川尚輝（東南大学・院）

本研究は「国際漢語教育漢語水準等級標準」を基準に、日本人学習者に対する中日同形語の効果的な教授法を探究するものである。中日同形語は形が同じでも意味が異なり、学習促進と同時に混乱や誤用を招きやすく、日本人学習者にとって難点となる。本研究では文献研究、比較分析、誤用分析、教授実験を用い、同形語の特徴と学習上の誤り、教授方略を体系的に検討した。分析の結果、初中級段階では同形同義語が多いが、近義語・異義語の誤用が目立つことが分かった。また、「HSK 動態作文コーパス」に基づく誤用調査から、母語の負の転移が主な原因であると判明した。最後に、第二言語習得理論を基礎に文脈化入力、語義弁別訓練、対照教授、語塊化学習などの方略を提案し、実験を通して有効性を確認した。本研究は標準と偏誤分析を結びつけ、実践的教授法の新たな視点を提示した。

発表者 2・研究発表

“V+N+了”はなぜ仮定条件節に現れるのか—“了 2”の<状態パーフェクト>的用法とムード的意味の消失

毛興華（東京大学）

“了 2” は従来、話者の主観的態度に関わるムード的意味を伴うとされ、命題内容のみに関わる動詞接辞“了 1” と違い、文末以外の統語位置に現れにくいと考えられてきた（例：“吃了饭就回家”、“*吃饭了就回家”）。しかし実際の使用においては、“到地方了就给家里打电话”のような“V+N+了”形式が仮定条件節に現れる用例が少なからず見られ、教育現場でもしばしば問題視されている。本発表ではこの現象について、“了 2”には日本語の<状態パーフェクト>と類似する事態認識の様相を示す用法があることを指摘する。この用法では“了 2”は結合する述語形式の語彙的・必然的結果のみを直接的に捉え表し、発話時状況に関連づけて先行運動の結果・効力を推定する必要がないため、ムード的意味を伴わないと考えられる。さらに、コーパスを用いて、仮定条件節に現れる“V+N+了”における V の語彙アスペクト類型ごとの出現割合を分析し、上記の指摘の妥当性を確認した。

発表者 3・実践報告

学生が主体的に学ぶ「読解」の授業の試み

謝平（福岡大学・教授）

周知のように、2012 年 8 月に文部科学省中央教育審議会により、学生が主体的に学ぶ「能動的学修（アクティブ・ラーニング）」が推進されている。一方、読解の授業では従来、文法訳読法（Grammar-Translation Method）が主に用いられてきた。この方法は文法の習得と読解力の向上には有効であるものの、学生が受動的になりがちで、「聴く」「話す」「書く」といった他の言語能力を伸ばしにくい。結果として、コミュニケーション能力の向上にもつながりにくいという課題がある。さらに、AI や翻訳アプリの普及により、自ら考えようとしない学生も増加している。本発表では、中国語読解の授業においても学生が主体的に学ぶ可能性を探ることを目的とし、本学の中国コース 3 年生を対象とした「読解」の授業実践を紹介する。加えて、実施したアンケート調査の結果をもとに、読解授業における能動的学修の実施可能性および学生の満足度について考察する。最後に、今後の課題と展望を述べる。